

## 『新東鑑』の写本

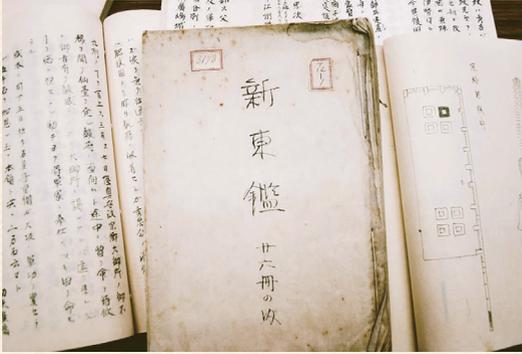


『新東鑑』の写本 全26冊（うち23冊現存） 女子大学史料センター所蔵

『東鑑』（『吾妻鏡』）は、鎌倉幕府の初代将軍・源朝から第6代将軍・宗尊親王まで6代の将軍記という構成で記されたものであるが、『新東鑑』は江戸時代の徳川家康の生涯を中心として安永2年（1773）に編纂されたものである。本編が20巻、附録3巻、追加2巻の計25巻という大部の歴史書である。今日では国立国会図書館デジタルコレクションでも容易に閲覧が可能な史料でもある。

今回紹介するものは、この現物ではなく、「写本」。なぜこの写本を同志社の逸品として紹介させていたのか。それはこの写本の成立の背景に、同志社女学校時代における生徒の飽くなき勉学に対する熱意が存在するからである。

明治29年（1896）春、女学校の生徒が、寺町通のある古書店にてこの『新東鑑』の写本を見つけたのがきっかけとなる。この26巻からなる写本は購入するには10円近くかかり、これは当時の公務員の初任給に近い額であった。高価なものゆえ、生徒たちではもちろんのこと、当時「経費節減の折柄」であった女学校でも購入することができなかった。寄附金での購入も諸般の事情から叶わず、生徒たちの同書を手したい



生徒らが描いた挿絵

気持ちが高まるなか、教員のアドバイスを本書を借り受け、翌年1月30日より生徒が分担して書き写すことになった。寮生を中心とし、専門科の全級と4年生は1冊もしくは半分を分担し、3年、2年生の有志も加わって計32名の生徒が書き写す作業に携わった。文字の一字一句はもちろんのこと、挿絵も丁寧に毛筆で描き写されていった。放課後の時間や、

就寝前に寸暇を惜しんでの謄写作业は2月29日まで続き、ようやく完成を迎えることとなった。事務室の机の上に、全26冊4000ページにわたる写本を積み重ねて眺めた際の感慨は、如何ばかりであったろうか。

今日では貴重な文献資料もデジタル化されるものが多く、どこからでも容易に検索・閲覧できる時代となり、その労は、かつてに比べて飛躍的に軽減されている。学習形式もPCはもちろんのこと、タブレット端末も小中学校に普及し多様化してきている。そうした環境の変化の中で、この『新東鑑』の写本は、史的な意義以上に、かつて生徒たちが苦勞の末に見つけ出し、借り受け、全て手作業で書き写すという勉強に対してのほとはしる熱意を私たちに伝えてくれたものがあり、生徒たちが創り上げてきた「逸品」といえよう。

(女子大現代社会学部教授 天野 太郎)